

『源氏物語』における「おほどか」の負のイメージについての考察

——浮舟・女三宮・夕顔・玉鬘・八宮等を中心に——

中山 幸子

一、はじめに

『源氏物語』には、人間の性質や状態を表す言葉が多く用いられている。「おほどか」「おほどく」「おほどき過ぐ」(動上二)「うちおほどく」(動四)、「うちおほどく」(動下二)、「おどく」(動下二)を含む^①は、その中の一つの言葉である。『源氏物語索引』によれば、「おほどか」は五十六例〔「おほどかなり」(形動) 四十一例、「おほどく」(動四) 九例、「おほどき過ぐ」(動上二) 二例、「うちおほどく」(動四) 二例、「うちおほどく」(動下二) 一例、「おどく」(動下二) 一例〕である。『源氏物語』以外の作品についての「おほどか」は、『古典対照語い表』^②によれば、『枕草子』に一例のみということだ。用例が極めて少ない。いうなれば、「おほどか」は『源氏物語』特有の言葉のようにも見られる。また、「おほどか」は、主として女性に用いられるという点においても、『源氏物語』を理解する上に重要な言葉の一つに目される。そこで、各登場人物に対する「おほどか」の用例を見ると、浮舟十例、女三宮七例、秋好中宮五例、玉鬘四例、中君四例、

夕顔三例、末摘花二例、源氏二例、紫上二例、花散里二例、雲井雁二例、落葉宮二例、女二例、八宮一例、女二宮一例、明石君一例、明石女御一例、「蜩」巻の女童一例、「浮舟」巻の女童一例、女の手紙一例、夕霧の和琴の音柄一例、鶯の初声一例となっている。

『源氏物語』における「おほどか」についての先行研究論文は、中西良一〈「おいらか」「おほどか」について——源氏物語用語覚書——〉、木船重昭〈紫式部の精神的展開と源氏物語の達成（下）〉⁽⁴⁾、大下博子〈「ここし」「こめかし」と「おほどか」について——源氏物語の用例を中心に——〉⁽⁵⁾、加藤玲〈「おほどか」な女君——浮舟から寢覚の上へ——〉⁽⁶⁾、加藤明子〈花散里の形容から見える源氏・六条院の変化——「おいらか」「おほどか」「のどやか」の違いから——〉⁽⁷⁾、児玉里麻〈「おいらかなる紫の上——『源氏物語』における「おいらかなり」と「おほどかなり」の考察——〉⁽⁸⁾、中嶋朋恵〈『源氏物語』浮舟における「おほどく」「おほどか」〉⁽⁹⁾、針本正行〈血脈の言葉——夕顔・玉鬘母子の「おほどか」——〉⁽¹⁰⁾、〈『源氏物語』の「おほどか」——宇治八の宮一族の血脈の言葉を視点として——〉⁽¹¹⁾等が見られる。以上の先行研究については、論述の際に必要なに応じて触れていきたい。

先行研究においてすでに指摘されていることであるが、「おほどか」は、主として女性の性格や状態の美質を形容する場合と、「おほどか」過ぎて好ましくない性格や状態を形容する場合とに用いられている。論述に当たっては、前者の「おほどか」を正のイメージとし、後者の「おほどか」を負のイメージとしての用例とする。本論では、先行研究の中のどういふ人物について、どのように「おほどか」が用いられているかという論を受けて、「おほどか」の負のイメージという観点から、「おほどか」の用いられている人物の背景を考察することをねらいとする。取り挙げる用例は、浮舟、女三宮、夕顔、玉鬘、八宮等についての「おほどか」の負のイメージのものである。なお、類義語の「おいらか」については、別稿を予定している。同じく類義語の「おほのか」は、『源氏物語』に用例が見られないので、考察の対象とすることが出来ないことを断って置きたい。論述に当たっては、日本古典文学大系『源氏物語』⁽¹²⁾（以下、大系と表記）を底本とする。

二、浮舟に対する「おほどか」について

浮舟に対する「おほどか」は、全部で十例見られる。その内訳を述べると、「おほどか」七例、「おほどき過ぐ」二例、「おほどく」一例となる。「おほどか」が十例ということは、『源氏物語』の中で浮舟に対して一番多く用いられている。「おほどか」は、浮舟の人物造形に深く関わっている言葉の一つとして見る事が出来よう。浮舟に対する「おほどか」は、正のイメージとして用いられていると見られるものが五例、負のイメージとして用いられていると見られるものが五例である。以上のように、浮舟に対する「おほどか」は正のイメージの用例もあるので、当時の女性の美質を備えていたと見ることも、もちろん出来るわけである。また、乳母が浮舟に語る言葉の中に、「たゞおほどかにて見え奉り給へ。」（「東屋」五―一七三頁）とあることから、「おほどか」は女性の美質として尊重されていたことが出来る。なお、中西良一は、先に挙げた論文の中で、「おほどか」は親愛感を誘い、可憐美的傾向を含むことを指摘している。大下博子は、先に挙げた論文の中で、「おほどか」は女性についての描写に用いられると述べている。「おほどか」は、女性の美質を形容する言葉として用いられているが、「おほどか」過ぎた場合にはどのようなことになるのか。過ぎたるは及ばざるがごとしといわれるように、「おほどか」過ぎた場合には、負のイメージに移行すると見ることが出来る。浮舟に対する「おほどか」が負のイメージとして用いられている場合についてその背景を考察することをねらいとする。まず「東屋」巻における浮舟に対する「おほどか」について考察をする。乳母が、浮舟を中君に紹介しようとする場面である。

① ひき起して、まゐらせたまつる。我にもあらず、人の思ふらんことも、恥づかしけれど、いと、やはらかに、おほどき過ぎ給へる君にて、おし出でられて、居給へり。

（「東屋」五―一七四頁）

「おほどき過ぎ給へる君にて」とある浮舟は、どのような人物であるかその背景を探って見る。浮舟の父は八宮であり、母は中将君である。中将君は、八宮に浮舟のことを告げた。八宮は、「さもやあらむ」（「宿木」五―九九頁）と言って浮舟を認知しなかった。中将君は、八宮から姿を消した。その後、陸奥守の後妻となって浮舟を伴って下向した。中将君の夫は、陸奥守の後、常陸介となった。中将君は、浮舟を連れて常陸国へ下向した。浮舟は、都から遠く離れた鄙の地である常陸国で成育し十九歳の時に家族と共に上京した。上京後浮舟に縁談が持ち上がった。相手は左近少将の君である。浮舟の母は喜んで婚礼の支度をした。ところが、左近少将は、浮舟が常陸介の継子であることを知り、婚礼の日も間近に迫った時に、立腹して破談を申し込んできた。常陸介は、「外さまへ、思ひなり給ひぬべかなれば、「同じくは」と思ひてなむ、「さらば、御心」と、ゆるし申しつる」（「東屋」五―一四四頁）とあるように、喜んで左近少将を実娘の婿に迎えた。浮舟の母は、悲嘆憤慨した。乳母も憂憤した。母は、浮舟を中君のもとに依頼した。浮舟は、二条院の西の対に身を寄せていた。匂宮が、中君を訪問した折に浮舟の姿を発見した。匂宮は、浮舟に対して新参の侍女かといって言い寄った。が、乳母の機転と、中宮からの使者の来訪とによって事なきを得た。乳母は、浮舟に対して、「世を知り給へる人こそあれ」（「東屋」五―一七四頁）と、男女の関係を知っていたならともかくも知らないためにと、世故に疎いことを嘆いた。浮舟に対する「おほどか」は、以上のようなことが背景となっている。浮舟は、鄙の地である常陸国において成育したために、都の人のように物事をそつなく処理することが巧みでなかったことに対して「おほどか」が負のイメージで用いられている。

木船重昭は、「おほどか」系人物の性格の認識・評価として「〔A〕極度肯定評定（望ましいものとして理想化・高次元化された女性の性格美としての判定）〔B〕肯定評定（好ましい女性の性格美としての判定）〔C〕一般的肯定判定（伝統的な慣用法で、低次元の肯定としての判定）〔D〕否定評定（好ましくない性格としての判定）〔E〕極度否定評定（論外

であり毀貶・輕蔑・忌避すべき性格としての判定」という分類をしている。木船は、用例①の浮舟に対する「おほどか」に「D」の評定を与えている。浮舟は、「おほどき過ぎ給へる」とあるように、「おほどか」の度合いが過ぎていたので、木船の「おほどか」に対する「D」の評定は穩当であるといえよう。なお、加藤玲は、先に挙げた論文で、「おほどか」は、「特に庇護される女性に多く使われるという特徴がある。」と述べているが、浮舟もその中の一人であると見られる。さらに、加藤玲は、『源氏物語』の「おほどか」について、「女性らしさを表すキーワードなのではないだろうか。」と述べているが、当時において、庇護されるということが、女性の生き方であったことを思えば、穩当な見方ということが出来る。浮舟に対する「おほどか」が最も多く用いられているということは、女性らしさを表現するための言葉としての役割を担っているとも見ることが出来る。また、女性らしいが故に、「おほどか」過ぎると人生を踏み外す危険を孕んでいることを示唆しているとも見られる。この①の用例においても、「おほどか」過ぎたために、姉である中君の夫との情事に至る危機から、乳母の機転と中宮からの来訪者とによって、辛うじて救われたということが背景に語られている。次も同じく、「東屋」巻における浮舟に対する「おほどか」の用例である。中君が、浮舟を大君によく似ていると思う場面である。浮舟の人物像がより鮮明に描き出されている。

②額つき・まみの、薰りたる心地して、いと、おほどかなる貴さは、たゞ、それとのみ、思ひ出でらるれば、絵は、殊に目もとゞめ給はで、「いと、あはれなる、人のかたちかな。いかで、かうしも、ありけるにかあらむ。故宮に、いと、よく、似たてまつりたるなめりかし。

（「東屋」五一―一七五頁）

中君は、「いと、おほどかなる貴さは」と、言って今は亡き大君に浮舟がよく似ていることに驚きの目を向けている。そ

れもそのはず、弁尼は、「(浮舟の)は、君は、故北(の)方の御姪なり」(「宿木」五——一〇〇頁)と、薫に語っている場面があることから、浮舟の母は、八宮の北の方と血族関係になっているので、似ていても不思議はなかった。さて、中君は、「かれは、限りなく貴に、け高き物から、懐しう、なよらかに、かたはなるまで、なよ／＼と撓みたる様の、し給へりしにこそ。」(「東屋」五——一七五頁)と、大君について、この上もなく上品で女性としての美質を備えた理想的な人柄であったことを回想している。それに対して浮舟は、「これは、また、もてなしのうひ／＼しげに、よろづの事を、慎しうのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ、劣りたる。」(同頁)としている。このことから、浮舟は、容貌などが大君によく似ていたけれども、内面的な魅力の滲み出る優雅さにおいては劣っていることが知られる。なお、中西良一は、先に挙げた論文で、「おほどか」について「感覚美、脆弱性を比較的に濃くし、精神性倫理性の面に於いては「おいらか」に及ばぬ点のあることを観察した」(四〇頁)と述べている。浮舟に対する「おほどか」は、中西良一の指摘する「感覚美」であるということが出来よう。中君は、浮舟が鄙の地である常陸国で成長したために、都に住んでいた大君と比較して洗練の度合いが劣っているということに気付いていたものと見られる。また、中君は、浮舟が今後大君の形代として薫の寵愛を受けた場合にはどうしたらよいかということについて、「故／＼しきけはひだに、持てつけたらば、」(「東屋」五——七五頁)と、評言している。なお、大君には「おほどか」の用例は、一例も見られないということに対して、単なる偶然と見ることは出来ないだろう。作者紫式部の繊細な感覚によって、「おほどか」という言葉を用いて表現する人物と、そうでない人物とを厳選していたと見るべきである。浮舟と大君とは、外見的に似ていたけれども、内面的な美質の洗練の度合いにおいて異なっていたことを、「おほどか」によって書き分けていたと見るべきである。

次も、「東屋」巻における浮舟に対する「おほどか」の用例である。薫が、浮舟を大君と比較しながら眺めている場面である。

③かき起し給へば、をかきき程に、さし隠して、つゝましげに見出だしたるまみなどは、いと、よく、思ひ出でらるれど、おいらかに、あまり、おほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。「いと、いたう、こめいたる物から、用意の浅からず物し給ひしはや」と、なほ、行く方なき悲しさは、むなしき空にも、満ちぬべかめり。

〔東屋〕五一―一九四頁〕

薫は、「つゝましげに見出だしたるまみなどは、いと、よく思ひ出でらるれど」というように、浮舟が大君に似ていると思った。が、それは、表面的な感じであつたことに気付いた。薫は、「おほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。」とあるように、おっとりし過ぎている浮舟に対して不安を感じている。さらにまた、薫は「いと、いたう、こめいたる物から、用意の浅からず物し給ひしはや」と大君を回想している。大君は、実にたいそうおっとりしていながら、男女関係においては注意が行き届いていた。それに対して、浮舟は、男女関係についての注意が大君には及ばない点があるように感じられる。薫は、そのことに対して、「行く方なき悲しさは、むなしき空にも、満ちぬべかめり」とあるように、大君に対するよくな期待を浮舟にかけることは出来ないことを嘆いている。

なお、木船重昭は、当該部分の浮舟に対する「おほどか」に〔D〕の評定を与えている。この場合の「おほどか」は、負のイメージとして用いられているので妥当な評定といえよう。次は、「浮舟」巻における浮舟に対する「おほどか」の用例である。薫が匂宮と浮舟との関係について心中思惟をしている場面である。

④あり難き物は、人の心にもあるかな。『らうたげに、おほどかなり』とは、見えながら、色めきたる方は、添ひたる人ぞかし。この宮の御具にては、いと、良きあはひなり」と思ひも譲りつべく、退く心地し給へど、「やむごとなく

思ひそめ、始めし人ならばこそ、あらめ。

〔浮舟〕五―二五七頁〕

匂宮は、「（薫が）忍びて、夜、とまり給ふ時もあり」（〔浮舟〕五―二〇八頁）という人の話を聞いた。その場所を大内記の道定に調べさせ、宇治であることを知った。匂宮は、道定に薫が宇治に滞在しない日を調べさせた。薫の留守を狙って、道定の案内で宇治を訪ねた。匂宮は、薫の声に元来かすかに似ていたので、薫に扮して浮舟の寝所を訪ね逢瀬を遂げた。その時の浮舟は、「あらぬ人となりけりと思ふて、あさましう、いみじけれど、声をだに、せさせ給はず。」（〔浮舟〕五―二一七頁）とあるように、薫ではないことを知りながら、「おほどか」過ぎた性格のために巧みに対処することが出来なかった。薫が、浮舟に抱いていた危惧とは、男女関係における注意であったことが知られる。「おほどか」は、女性の美質として大切な要素を持っているが、「おほどか」過ぎるという性格は、一大事件を引き起こす原因にもなり得ることがある。「おほどか」という言葉は、女性の美質を表す場合にも用いられるが、「おほどか」過ぎて不覚の失敗を引き起こす場合にも用いられる。浮舟の場合は、後者の例である。浮舟は、「おほどか」な性格のために、異腹の姉である中君の夫の匂宮との密通という大事件を引き起こした。この事件を知った薫は、浮舟に対して「らうたげに、おほどかなり」とあるように、可愛らしく、おっとりしているように見えるものの思慮深さに欠けているので、匂宮の連れ合いとして譲ってしまおうかと思った。が、浮舟と全然逢わなくなるのも淋しい。最初から正妻と決めていた人ではないので、匂宮も通い、自分も通う隠し妻としておこうと決意した。薫は、浮舟に「浪越ゆる頃とも知らず末の松まつらんとのみ思ひけるかな」（〔浮舟〕五―二五八頁）という和歌を送った。その和歌を見た浮舟は、「胸も塞がりぬ。」（同頁）とあるように大きな衝撃を受けた。その後の浮舟は、人生について悩み遂に入水を決意した。その場面が次の「浮舟」巻における浮舟に対する「おほどか」の用例である。

⑤こめき大どかに、たをく／＼と見ゆれど、け高う、世の有様をも、知る方少なくて、おほしたてたる人にしあれば、少し、おずかるべき事を、思ひ寄るなりけんかし。

〔浮舟〕五―二六五頁

浮舟は、右近や侍従が匂宮に心を寄せているように思っていることを知って、「我を、宮に心寄せたてまつりたと思ひて、この人／＼の言ふ、いと、恥づかしく、心にはいづれとも、思はず、」〔浮舟〕五―二六二頁と、意中を述べている。浮舟は、薫と匂宮のいづれにも心を決め難く悩んでいる様子を窺うことが出来る。その結果、「わが身一つの亡くなりなんのみこそ、目安からめ。昔は、懸想する人の有様の、いづれとなきに、思ひ煩ひてだにこそ、身を投ぐる例もありけれ。」（同頁）と、入水を決意するに至った。ここでいう「身を投げる例」とは、『万葉集』の巻九「菟原処女の墓を見る歌一首并せて短歌」⁽¹³⁾（二八〇九）に詠まれている。菟原処女は、千沼壮士と菟原壮士に求婚されるが、どちらとも決めかねて入水した。二人の男も後を追ひ入水した。男の墓は、菟原処女の墓の両脇に作った。また、巻十六、「有由縁并せて雑歌」⁽¹⁴⁾（三七八六）の詞書に、桜児が、二人の男性に求婚されて、一人を選ぶには忍びなくて、山中において木に頸を吊って自殺した。二人の男性も後を追ひ自殺した。また、巻十六の三七八八番歌の詞書には、縵児が三人の男性に求婚されて、一人を誰にするか決めかねて入水した。『大和物語』の百四十七段、「生田川」⁽¹⁵⁾は、摂津の国に住む女が二人の男に求婚されて、いづれとも決めかねて入水した。二人の男も後を追って入水した。菟原処女や桜児や縵児および摂津の国に住む女は、純情可憐な乙女達である。この乙女達は、二人または三人の男性から求婚された場合に、その中の一人を選んだとしたなら、後に残された人が悲しむだろうという、純情さから自らの命を断っている。浮舟も菟原処女や桜児や縵児および摂津の国に住む女のように純情可憐な乙女である。浮舟は、薫と匂宮との二人の男性から求婚されて、その男性のうちの一人に決めたとしたならば、後に残された人が悲しむだろうという純情さから、いづれにも決めかねて入水を決意した。

浮舟は、「こめき大どかに」というように、子供っぽくおっとりしているとあるが、この時の浮舟の年齢は、二十二歳である。二十二歳の浮舟に対して「こめき大どかに」と言うことは、暦年齢に対して精神年齢の発達が伴っていない状態を指していると見られる。また、「たをく」と見ゆれど」とあるように、なよなよと見えるけれども、「け高う、世の有様をも、知る方少なくて、おほしたてたる人にしあれば」というように、男女間の関係を上品に処理する処世術を周囲の人々から教えられることも少ないまま成長した人である。都で成長した人であるならば、周囲の人々から教えられる機会もあっただろうが、浮舟の場合は、都から遠く離れた鄙の地常陸で成育したために、世間の物事を上品に判断して巧みに処理する処世術を学ぶ機会もないまま現在に至っている。そのために、浮舟は、入水を決意した。以上のように、浮舟に対する「おほどか」は、女性の美質を表現する場合に用いられる正のイメージではなく、「おほどか」な性格のために適切な判断をすることができないために、人生に大きな誤りを起こす結果になったことを背景として負のイメージで用いられている。

三、女三宮に対する「おほどか」について

女三宮に対する「おほどか」は全部で七例あるが、その内訳は、「おほどか」二例、「おほどく」五例となっている。「おほどか」が七例ということは、浮舟に次いで二番目に多いことになる。「おほどか」は、女三宮の人物造形に深く関わっている言葉の一つと見ることが出来る。女三宮の美質を形容する言葉として、すなわち正のイメージとして用いられていると見られるものが二例である。女三宮の性格や態度に対して悪い意味を形容する場合、すなわち負のイメージとして用いられていると見られるものが五例である。本論では、女三宮に対する「おほどか」の負のイメージの用例について考察をすることをねらいとしている。まず、「若菜上」巻における女三宮に対する「おほどか」の用例を考察する。夕霧が女三

宮を批評している場面である。

①御けはひ・有様も、み聞き給ふに、いと若くおほどき給へる一筋にて、うへの儀式はいかめしく、世の例にしつばかり、もてかしづきたてまつり給へれど、をさく、けざやかに、もの深くは見えず。〔若菜上〕三―三〇一頁〕

夕霧は、かつて朱雀院から「おおきおとゞのわたりに、今は住みつかれたりとな。年ごろ、心えぬさまに聞きしが、いとほしかりしを。耳やすき物から、さすがに、ねたく思ふことこそあれ」〔若菜上〕三―二一七頁〕と、女三宮との結婚を仄めかされたことを思い出している。夕霧は、現在も格別な思いで女三宮に関心を寄せている。女三宮は、夕霧の近くに住んでいることもあって、夕霧は、何か口実を見付けては訪問する習慣になっている。そのため自然と女三宮の雰囲気や様子を見たり聞いたりするにつけ、「いと若くおほどき給へる一筋にて」という印象を受けている。夕霧が、女三宮を「いと若く」と感じているが、この時の年齢は十五、六歳と見られる。したがって、これは暦年齢についてではなく、精神年齢に対して若いと感じていたものと見られる。また、夕霧は、女三宮に対する源氏について、表面の作法は厳かに丁寧であり、世間の例になるような様子であると受け止めている。女三宮の様子は、夕霧の目を通して描かれている。夕霧は、「いと若くおほどき給へる一筋にて」という点に不安を感じている。以上のようなことを背景に、女三宮に対する「おほどか」は、負のイメージとして用いられている。なお、木船重昭は、女三宮に対する当該部分の「おほどか」について〔E〕の評定を与えている。木船は、筆者と同様に負のイメージとしての「おほどか」の用例としている。次は、「若菜下」巻における女三宮に対する「おほどか」の用例である。語り手は、女三宮が二十歳になりながら以前として変わらなさと批評している場面である。

② ひめ君のみぞ、おなじさまに、若くおほどきておはします。女御の君は、今は、おほやけざまに、思ひ放ちきこえ給ひて、この宮をば、いと心苦しく、幼からん御むすめのやうに、思ひはぐゝみたてまつり給ふ。

〔若菜下〕三―三三六頁〕

女三宮だけが以前として、「若くおほどきておはします」とあるが、他の女性達との比較によって語られている。鬚黒の北の方になった玉鬘は、「大人び果て、」〔若菜下〕三―三三六頁〕とあるように、すっかり大人らしくなった。「女御の君は、今は、おほやけざまに、思ひ放ちきこえ給ひて」というように、源氏は、明石女御を今上の方に任せている。女三宮は、暦年齢が二十歳になるので、若いということは精神年齢に対してのことである。女三宮が、源氏の所へ興入れした時は、「ひめ宮は、げに、まだいと小さく、かたなりにおはするうちにも、いと、いはけなき気色して、ひたみちに若び給へり。」〔若菜上〕三―二四七頁〕とあるように、若かった様子が描かれている。その当時から変わることなく若いということである。評釈では、興入れ後七年も経っていないながら、精神的に成長していない原因に、「源氏に託したために、いつまでも幼いのかも知れない。」〔若菜下〕七―三三五頁〕と、女三宮の精神年齢の若さは、源氏に一因があるのかも知れないと指摘している。源氏は、「幼からん御むすめのやうに」とあるように、大事に取り扱っているので、過保護と見ることも出来る。木船は、当該部分の女三宮に対する「おほどか」に〔E〕の評定を与えているが、美質を形容する言葉としての用例とは見られないので妥当である。次も同じく、「若菜下」巻における女三宮に対する「おほどか」の用例である。柏木は、女三宮との密事を源氏に露見されて困惑している場面である。

③ 「よきやうとても、あまり、ひたおもむきに、おほどかに、あてなる人は、世の有様も知らず、かつ、さぶらふ人

に、心おき給ふこともなくて、かく、いとほしき御身のためも、（人のためも）いみじき事にもあるかな」と、かの御ことの心苦しきも、え思ひ放たれ給はず。

〔若菜下〕三―三九九頁〕

「おほどかに、あてなる人は、世の有様も知らず」とあるが、女三宮の出自について述べると、父は朱雀帝、母は藤壺女御である。藤壺女御は、朱雀帝が春宮の時に入内して中宮となるはずの人であったが、先帝が早世したために、すっかりした後見人がなくなった。母方は、家柄という程でもなく更衣腹であったために、宮中生活も頼りない様子であった。そのうちに、朧月夜が内侍督として入内したので、時の権勢に敗退し、やがて世を恨むようにして亡くなった。朱雀帝には、春宮の他に女宮四所あったが、その中でも女三宮を鐘愛した。朱雀帝は、病が重くなるにつれ、出家を思い立った。が、女三宮の処遇が心配であった。女三宮は、皇統の血筋であるが、母は亡く、また後楯になる人もいないために、朱雀帝が出家をすれば孤独な存在となる。そのことが心配で、女三宮の臣籍降嫁を考えている。源氏は、朱雀帝から女三宮の後見役を依頼された。源氏は、朱雀帝のたつての願いということで、紫上との確執を心配しながらも承諾した。源氏は、四十の賀の後に、女三宮を六条院に迎えた。

柏木は、女三宮との結婚を所望していた。女三宮に対する憧憬心は格別であった。三月頃の麗らかな日和に、螢兵部卿宮や衛門督や夕霧などが、六条院に集まって蹴鞠をしていた。その時、「几帳のきは、すこし入りたる程に桂姿にて立ち給へる人あり。階より西の二の間の東のそばなれば、まぎれ所もなく、あらはに見入れらる。…姿つき、髪のかゝり給へるそば目、いひ知らず、あてにらうたげなり。」〔若菜上〕三―三〇七―三〇八頁〕とあるように、柏木は、猫が綱を御簾の端に引っかけて持ち上げた時に桂姿の女三宮を垣間見た。当時において、男が女の姿を見ることが、女性が、貞操を失うほどの重大事件であった。柏木に垣間見られた女三宮は、扇で顔を隠すことなく、跪くこともなく部屋の中に

立っていた。当時の高貴な女性は、御簾の内にいる時も、必ず几帳を立てて顔を扇で隠して座っていなければならない。室内を移動する場合は、必ず膝行することになっていた。この垣間見がもとになって密会の場面へと展開する。柏木は、桂姿の女三宮を垣間見てから、憧憬心は思慕の情へと変わった。柏木は、中納言となり、朱雀帝の女二宮と結婚した。女二宮は、更衣腹であるが女三宮の姉である。柏木は、結婚後も女三宮への思慕の情を募らせた。蹴鞠の折、女三宮を垣間見てから七年後の葵祭の前の御禊の前夜のことである。源氏は、紫上の看病のために留守であった。女三宮に仕えている女房などは、葵祭の準備のために留守となった。柏木の手引きをしている小侍従一人のみが、女三宮に仕えていた。小侍従は、よい機会と思って柏木を御帳の東面の御座の端に案内した。「宮は、何心もなく大殿籠りにけるを、ちかく、男のけはひのすれば、院のおはするとおぼしたるに、うちかしこまりたる気色見せて、床のしもに、抱きおろしたてまつるに、物におそはるゝかと、せめて見あげ給へれば、あらぬ人なりけり。」（「若菜下」三―三七二頁）とあるように、女三宮は、柏木を源氏ではないと知っていた。しかし、「あまり、ひたおもむきに、おほどかに、あてなる人」というように、物事を適切に判断して巧みに対処する処世術を知らなかった。そのために女三宮は、柏木に対してどうすることも出来なかった。また、女三宮は、「世の有様も知らず」とあるように、宮中という特殊な環境において成育したために、男女関係についても疎かった。女三宮は、柏木と密通事件を引き起こした。柏木は、女三宮の異母の姉である女二宮の夫である。女三宮は、自分自身に不注意なばかりでなく、小侍従のような傍に仕えている人に対する注意も怠っていた。そのために、柏木との密会が源氏に露見されるに至った。その重大事件の起因になったのは、「御しとねの、少しまよひたるつまより、浅緑の薄様なる文の、押し巻きたる端みゆるを、何心なく引き出で、御覧するに、男の手なり。」（「若菜下」三―三九二頁）とある。これは、源氏が、柏木の後朝の手紙を発見した場面である。女三宮は、小侍従に対して常日頃の教育が悪かった。柏木が嘆くのも当然のことである。女三宮は、姉の夫との密通ということで、姉妹という信頼関係も破綻し、自分の夫であ

る源氏との夫婦愛という関係にも亀裂が生じ、孤独の身となり仏の道へと導かれていく。「おほどか」は、女性の性格や態度についての美質を形容する言葉であるが、その度合いが過ぎて世故に疎い場合には、女三宮当事者ばかりでなく、源氏も柏木も女二宮も朱雀院も小侍従もというように、周囲の人々までも不幸へと誘うことになるという深い意味を持っている。なぜ、女三宮は、「おほどか」であったのか、ということになる。女三宮は、皇統の血筋を引く高貴な身分として、一般社会から隔絶された宮中という砦の中で暮らしている場合には、何の問題も起こらない。が、臣籍降嫁して別世界に入っただけには、どうしても世故に疎く、すなわち一般社会の常識を知らないために、女性も女性らしく身を処していくという、いわゆる処世術が身についていない。そのために、人の道を踏み外すことになり、自らの人生を自ら破滅させる結果に成り得るといった一大事件を人物の背景に含んでいる言葉が「おほどか」である。以上のように女三宮は、宮中という特殊な環境において成育したために社会性の欠如という点が見られる。すなわち、女三宮は、処世術が身についていないということを背景に「おほどか」が負のイメージで用いられている。

次は、「勾宮」巻における女三宮に対する「おほどか」の用例である。薫は、母女三宮の勤行の態度が、「おほどか」であることに對して心配している場面である。紙幅の都合で用例のみを記載する。

④ あけくれ、勤め給ふやうなめれど、はかもなくおほどき給へる、女の御悟りのほどに、蓮の露もあきらかに、玉と磨き給はむこともかたし。

（「勾宮」四―二三四頁）

次は、「宿木」巻における女三宮に対する「おほどか」の用例である。語り手が、女三宮の性格について若いと述べている場面である。

⑤母宮は、いと若く、おほどきて、物しどけなき御心にも、かゝる御氣色を、「いと危く、ゆゝし」と思して、

〔宿木〕卷五―五三―五四頁〕

「母宮は、いと若く、おほどきて」とあるが、女三宮の暦年齢は、現在四十五、六歳と見られるので、精神年齢の若さに対して「若く」としたものである。この点については、評釈でも筆者と同様に女三宮の精神年齢が若く行き届かない点があることを指摘している。さて、児玉里麻は、先に挙げた論文の中で、〈女三宮は、「おいらか」「おほどか」ともに、よい意味ではない用例があり、女三宮に対する一種の皮肉的表現として使われていると言える。〉（一三二頁）としているが、女三宮に対する「おほどか」は、七例中五例が負のイメージによる用例であることから、例外とか、皮肉的に用いたとする見解には問題がある。う。「おほどか」は、女三宮が宮中という一般社会から隔絶された特殊な環境の中で成育したために世故に疎いということ、すなわち処世術が身についていないということを背景に負のイメージで用いられている。

四、夕顔・玉鬘・八宮等に対する「おほどか」について

夕顔に対する「おほどか」は、全部で三例見られる。その内訳は、「おほどか」二例、「おほどく」一例である。以上三例のうち、正のイメージの用例と見られるものが一例、負のイメージと見られるものが二例である。本論では、「おほどか」の負のイメージの用例について、その人物の背景を考察することをねらいとしている。したがって、夕顔に対する「おほどか」は、負のイメージの用例についてのみ考察をする。まず「夕顔」巻における夕顔に対する「おほどか」の用例につ

いて考察をする。源氏は、夕顔の「おほどか」な印象から彼女の人柄について、思いを巡らしている場面である。

①人のけはひ、いと、浅ましくやはらかに、おほどきて、物深く重きかたはおくれて、ひたぶるに、若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず、いと、やむ事なきには、あるまじ。

〔夕顔〕一一一三六―一三七頁〕

源氏は、尼君を見舞うついでに、惟光の案内である女を垣間見た。その女が、夕顔である。源氏は、「これこそ、かの、人の定めあなづりし、下の品ならめ。その中に、思ひのほかには、をかしき事もあらばなど」〔夕顔〕一一一三五頁〕と、雨夜の品定め折に、左馬頭が語った女性論を思い出し、その女に期待をかけていた。その女の住む所は、六条近辺で場末に当たる。宮中は、雅びの中心地で、高貴な人々の住む所であり、場末は賤の者が住む所という観念は、当時ごく一般化していたものと見られるので説明の必要はなからう。源氏は、六条近辺という地域に住むところから、夕顔を「下の品ならめ」と判断している。夕顔の人柄について、「いと、浅ましくやはらかに、おほどきて、物深く重きかたはおくれて」とあるように、柔順でおっとりしていて、思慮深さや重々しさは足りないといっている。また、「ひたぶるに、若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず」とあるように、ただひたすら若い様子に見えるのに、男女の道をまた知らないというでもない、源氏は、夕顔に対して思いを巡らしている。なお、木船は、夕顔に対する「おほどか」に〔B〕の評定を与えているが、「物深きかたはおくれて」とあるように、思慮深さや重々しさは足りないということなので、負のイメージの用例と見るべきであろう。源氏は、夕顔の死後右近から、彼女の素性を聞くことが出来た。夕顔の両親は早世した。父は、三位中将であった。ふとした機会に頭中将が少将だった時分に三年程夕顔のもとに通ってきた。夕顔は、少将との間に一人の女兒を設けた。が、夕顔は、去年の秋頃から正妻の嫌がらせにあって身を隠した。「西の京に、御乳母住み侍る所

になん、はひかくれ給へりし。それも、いと見苦しきに、住みわび給ひて、山里にうつろひなんと、思したりしを、今年より、ふたがりたる方に侍りければ、違ふとて、怪しき所にものし給ひしを」(「夕顔」一一一六六頁)とあるように、夕顔は、特殊な境遇にある人が住む所だと言われている西の京に住んでいた。その後も恵まれない人生を送っていた時に、源氏と出会って急逝した。夕顔についての人物の背景は、恵まれない環境のもとで西の京という特殊な地域に住み、特殊な境遇に関わっていたと見られる。そのために、夕顔の人物は柔軟で思慮深さや重々しさは足らなく、ただ若々しげに見える、恋愛沙汰の経験がないわけでもないと思われる。源氏と出会った当時は、身を潜めて六条近辺に住んでいたという特殊性を背景に、夕顔に対しての「おほどか」は負のイメージで用いられている。

次は、「玉鬘」巻における夕顔に対する「おほどか」の用例である。玉鬘一行が、初瀬詣の折、右近に遭遇した場面である。

②は、君は、たゞ、若やかに、おほどかにて、やはくとぞ、たをやぎ給へりし。これは、け高う恥づかしげに、もてなしなども、よしめき給へり。

(「玉鬘」一一一三五四頁)

「は、君は、たゞ、若やかに、おほどかにて、…」とあるように、夕顔は、ただ若々しくおっとりしていて、やさしくとやかであった。それに対して娘の玉鬘は、「け高う恥づかしげに、もてなしなども、よしめき給へり」とあるように、気品が高く、起居振舞などについては、こちらが気がひけるほどたしなみを心得ている。夕顔は、上品な風情など教養という点は、玉鬘に比べると劣っているということを背景として「おほどか」が負のイメージで用いられている。

玉鬘に対する「おほどか」は全部で四例見られる。内訳は、「おほどか」のみ四例である。そのうち正のイメージとして

の用例と見られるものが三例である。負のイメージとしての用例と見られるものが一例である。その一例について考察をする。次は、「胡蝶」巻における玉鬘に対する「おほどか」の用例である。源氏は、玉鬘の養父でありながら心が動揺している場面である。

③さはいへど、ゐなかび給へりし名残こそ、たゞありに、大どかなる方にのみは、見え給ひけれ、人の有様を見知り給ふまゝに、いと、さまようなよびかに、化粧なども、心してもてつけ給へれば、いとゞ、あかぬ所なく、花やかに、美しげなり。

〔胡蝶〕二一四〇四、四〇五頁

玉鬘は、母夕顔と死別し、父頭中将とは音信不通となっていたために、西の京に住む乳母の家で養育されていた。乳母の夫が、太宰府の少式になったので、「かのわか君の四つになる年ぞ、筑紫へはいきける。」〔玉鬘〕二一三三〇頁とあるように、乳母夫婦に連れられて四歳の時筑紫に下向した。そこで成長し、二十歳で上京した。上京当時、玉鬘自身、「いと、こよなくる中びたらんものを」〔玉鬘〕二一三六二頁と云っているように、鄙の地である筑紫での生活に田舎臭さが身に付いていたことに対して引け目を感じていたことが知られる。しかし、現在は、「人の有様を見知り給ふまゝに：花やかに、美しげなり」とあるように、都の人に習って化粧などもしているのだ、都で成育した人達と比べても遜色のないまでに美しくなってきた。が、上京当時の玉鬘は「大どかなる方にのみは、見え給ひけれ」とあるのは、鄙の地である筑紫という特殊な地域において成長したことが関わっていたことを示していると見られる。人間の成育には環境というものが大きく関わっていることはいうまでもない。このことは、浮舟がやはり鄙の地である常陸において成育したと相通ずるといえよう。

次も同様に鄙の地に関わる「若菜上」巻における明石女御に対する「おほどか」の用例である。語り手は、明石女御の生まれた所が辺境の地であることも知らなかったことに対して「おほどか」な性格であると非難している。やはり、明石女御の場合も「おほどか」が負のイメージで用いられているが、その背景には都から遠く離れた鄙の地との関わりということが見られる。明石女御に対する「おほどか」は、次の用例一例のみである。紙幅の関係で用例のみを記載する。

④は、君をば、もとより、かく、少しおぼえ下れるすぢと知りながら、生まれ給ひけんほどなどをば、「さる、世離れたる境にて」なども、知り給はざりけり。いとあまり、おほどき給へるけにこそは。あやしく、おぼくしかりけることなりや。

〔若菜上〕三―二七九頁〕

八宮に対する「おほどか」の用例は、当該部分一例のみである。『源氏物語』全体から見ても、男性の人物に関しての用例は他に見られない。そういう意味においても貴重な用例と見られる。「橋姫」巻における八宮に対する「おほどか」の用例を考察する。八宮の人柄について述べた場面である。

⑤まいて、世（の）中に住みつく御心おきては、いかでかは、知り給はむ。高き人ときこゆるなかにも、あさまじうあてに、おほどかなる女のおはすれば、古き世の御宝物、祖父おとゞの御処分、なにやかやと、尽きすまじかりけれど、ゆくへもなく、はかなく失せ果てて、

〔橋姫〕四―三〇二―三〇三頁〕

八宮は、「あさまじうあてに、おほどかなる女のおはすれば」とあるが、まず、その生い立ちから考察して見る。

「ちゝみかどにも、女御にも、疾くおくれ聞え給ひて」〔橋姫〕四―三〇二頁〕とあるように、桐壺院とも母女御とも、幼少時に死別したことが知られる。「はかゞしき御後見の、とりたてたる、おはせざりければ、才など、深くもえ習ひ給はず」〔同頁〕というように、しっかりした後見人がいなかったために、学問などを深く学ぶことが出来なかった。さらに、「まいて、世（の）中に住みつゝ御心おきては、いかでかは、知り給はむ」〔同頁〕とあるように、処世術のひとつとなる経済観念などを身に付ける機会はなかったことが知られる。皇統の血筋ということ、高貴な身分でありながら、驚くほど上品でおっとりしている女のものであったので、昔から伝わっていた宝物や、母女御方の祖父が大臣だった当時の遺産は、空しくどこかへ消えてしまった。後に残ったものは、調度品だけである。なお、評釈では八宮について、「音楽など趣味生活の方面は、卓越しておられるが、経済、法学といった面にはまるでお暗い上に、深窓の姫様のごとく世事に疎い方とあっては、財産管理能力などあろうはずもない。」〔橋姫〕十一―四八頁〕と筆者と同様の見解を述べている。

「とぶらひ聞え、心寄せたてまつる人もなし」〔橋姫〕四―三〇三頁〕とあるように、財産を失ったばかりでなく、八宮と交際する人もなくなったので、音楽の道に熱中した。なぜ、八宮は、孤独な存在となったのか。八宮は、源氏の弟であるが、冷泉院が春宮の時、朱雀院の母の弘徽殿太后が陰謀を企てた。春宮冷泉院を廃して、八宮を春宮として源氏方の勢力を消滅させようとする陰謀であったが途中で発覚した。そのために、八宮は、源氏方と絶縁状態になった。皇族として、それにふさわしい環境のもとで成育することが出来なかったために、世故に疎く、すなわち社会性に欠如していたために、物事を巧く解決していく能力に欠けていたと見られる。以上のようなことが背景となって、八宮に対する「おほどか」は、負のイメージとして用いられている。なお、大下博子は、先に挙げた論文の中で、男性についての「おほどか」の用例は例外と見てよいとしているが、その見解には問題がある。八宮に対する「おほどか」は、以上述べた通り、特殊な境遇にあって処世術が身についていないということ、すなわち社会性の欠如ということを背景に負のイメージで用いられている。

五、まとめ

『源氏物語』における「おほどか」は、女性の性格や状態の美質について形容する正のイメージの場合と人の性格や状態の好ましくないことについて形容する負のイメージの場合との両方に用いられている。本論では、後者の場合の「おほどか」を取り挙げて、負のイメージとして用いられている人物の背景を考察した。その結果、二つの傾向を見出すことが出来た。一つは、浮舟や玉鬘のように、都から遠く離れた鄙の地において成育したために、世故に疎いということ、すなわち社会性が欠如しているために処世術が身についていない場合に、負のイメージで「おほどか」が用いられている。夕顔のように西の京という特殊な地域に関わったことが背景にある人物に対しても同様に社会性の欠如ということが見られる。もう一つは、女三宮や八宮のように皇統の血筋でありながら、特殊な境遇において成育したために世故に疎く、すなわち社会性が欠如しているために処世術が身についていない場合に負のイメージで「おほどか」が用いられているということが出来る。二つの傾向に共通している点は、どちらも世故に疎いということ、すなわち、社会性が欠如しているために処世術が身についていないということが指摘される。そのために、浮舟や女三宮は、自らの人生を踏み外す一大事件を引き起こした。また、八宮は、先祖代々の財宝を失うに至った。以上のように、「おほどか」は、人物造形の背景となる特殊な成育地域や特殊な成育環境に関わる負のイメージを形容する重要な意味を含んだ言葉である。

参考文献

〔注〕

- (1) 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注 新日本古典文学大系別巻『源氏物語索引』岩波書店

二〇〇〇年五月(二八頁)

(2) 宮島達夫『古典対照語い表』笠間書院 平成四年九月(六三頁)

(3) 中西良一〈「おいらか」「おほどか」について―源氏物語用語覚書―〉和歌山大学学芸学会『和歌山大学学芸学部紀要8―人文科学―』昭和三十三年三月(三〇頁)

(4) 木船重昭『源氏物語の研究』大学堂書店 昭和四十四年九月

(5) 大下博子〈「ここし」「こめかし」と「おほどかなり」について―源氏物語の用例を中心に―〉『文教国文学』第三十号 平成五年七月(三五頁)

(6) 加藤玲〈「おほどか」な女君―浮舟から寢覚の上へ〉相模女子大学国文研究会『相模国文』第二十九号 平成十四年三月(一一頁)

(7) 加藤明子〈花散里の形容から見える源氏・六条院の変化―「おいらか」「おほどか」「のどやか」の違いから―〉早稲田大学『平安朝文学研究』第十一号 二〇〇二年十二月(三三頁)

(8) 児玉里麻〈「おいらかなる紫の上」―『源氏物語』における「おいらかなり」と「おほどかなり」の考察―〉松本寧至監修『日本文学の創造と展開』古典編 勉誠社 平成十三年二月(九七頁)

(9) 中嶋朋恵〈『源氏物語』浮舟における「おほどく」「おほどか」〉伊藤博・宮崎莊平編『王朝女流文学の新展望』竹林舎 二〇〇三年五月(三二二頁)

(10) 針本正行『平安女流文学の表現』第四章〈血脈の言葉―夕顔・玉鬘母子の「おほどか」―〉おうふう 平成十三年五月(九七頁)

(11) 針本正行〈『源氏物語』の「おほどか」―宇治八の宮一族の血脈の言葉を視点として―〉伊藤博・宮崎莊平編『王朝女流文学の新展望』竹林舎 二〇〇三年五月(三〇九頁)

(12) 山岸徳平校注 日本古典文学大系14、18『源氏物語』一、五 岩波書店 一九七九年七月、一九八〇年二月

(13) 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注 日本古典文学全集3『万葉集』二 小学館 昭和四十七年五月

(14) 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注 日本古典文学全集5『万葉集』四 小学館 昭和五十年十月

(15) 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注 日本古典文学全集8『大和物語』小学館 一九七二年十二月

(16) 玉上琢弥『源氏物語評釈』角川書店 昭和三十九年十月

〔本文中の点線・傍線は、筆者の記載による〕